様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：２５４０６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2017
課題番号：２５５６０３８７

研究課題名（和文）児童自立支援施設入所児の遂行技能プロフィールの解明と介入効果

研究課題名（英文）Evaluation and intervention for adolescents with problem behavior living in Japanise forster home

研究代表者
永吉　美香（MIKA, NAGAYOSHI）

県立広島大学・保健福祉学部（三原キャンパス）・助教

研究者番号：３０５８２３７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：非行等の問題行動があり、児童自立支援施設で生活している子ども達の、社会交流技能について評価を行った。その結果、施設で生活している子ども達の社会交流技能の全体的なレベルには大きく２つの山があり、１つめは「平均より低いが社会生活に明らかな影響を及ぼすほどの低さではないレベル」に、もう１つは「社会生活に明らかな影響を及ぼすレベル」にあった。また入所児の多くが「対人関係」を自分の問題として報告していた。このことは未熟な社会交流技能であることが非行と関連している可能性を示唆しており、より年少期間での社会経験の格差解消や、早期介入を行うことで、将来の非行行動を回避できる可能性が考えられる。

研究成果の概要（英文）：We conducted evaluation about social interaction skills of delinquent adolescents living in Japanese foster homes. As a result, we found out two groups about the quality of social interaction. One group was between average and -1SD, another was under -2SD. At the same time, most of subjects reported their problem about social interactions. These results suggests that adolescents' immature social interaction skills cause delinquent behaviors. We have to consider about the way to eliminate experience disparity and to intervene adequately during earlier stage of their life.

研究分野：作業療法

キーワード：社会交流技能　児童自立支援施設　非行

1.　研究開始当初の背景

非行傾向にある児については個人の資質や環境要因からの研究が多くなされてきていたが、実際何かをするときの「遂行技能」については明らかになっていたかった。

実際の子ども達に接すると、「上手く出来ない」ことが重なり問題行動へとつながっているケースに出会うことも多いが、データとして確認することはできていなかった。そこで、この点を明らかにする必要があると考えた。

2.　研究の目的

以下 2 点を通じて、「遂行」に焦点をあてた、健康的で自立的な生活を送る力を身につけるのに役立つ、包括的な支援モデルを確立する。

(1) 児童自立支援施設入所児の遂行技能プロフィールを特に対人技能において明らかにすること。
(2) 遂行技能プロフィール改善にむけた介入の効果検証。

３．研究の方法

(1)作業療法で用いる、社会交流技能評価（ESI）と運動とプロセス測定（AMPS）を用いて、日常の自然な場面での対人関係にかかわる遂行能力と、日常的な家事等の遂行能力を測定した。
(2)カナダ作業遂行測定（COPM）を用いて、本人の視点からの作業の問題についての主観をインタビューした。
(3)一部の子どもに対し、本人と共働してプログラム立案と介入実施をした後、ESI,COPM を用いて再評価を実施した

４．研究成果

全国の児童自立支援施設のうち 8 施設の協力を得、協力の得られた児に対して評価を実施した。当初予定では日常活動の遂行技能もデータを多く集める予定であったが、協力機関との話し合いで日常活動について測定できたのは一部対象者にとどまったので、分析は主に対人交流技能と作業の問題に関する面接結果を対象におこなった。また介入も試行的な内容にとどまった。

(1)対人技能に関する遂行プロフィールについて

協力児の全体的な遂行技能の質には−１SD 付近と-2SD 付近の２つのピークが見られた。この結果より該当児童の対人交流技能については、有意に未熟、あるいは有意な範囲ではないが同年齢の子どもに比して低いことが示唆された。

一方、社会交流に関わる各技能に関しては、該当児童が特に苦手とする技能などの特徴的なプロフィールは見られなかった。また、男女や障害の有無によって結果の値に有意差が見られることも無かった。

これらの結果の原因の仮説のひとつとしては、素因としての対人関係の苦手さが見逃されフォローされてこなかったケースが多いこと、二つ目には家庭状況や学校適応等の問題により、適切な対人技能を習得する機会に恵まれなかった可能性が考えられた。

なお、各児の作業遂行の質は、各職員との協議において報告されるものとは必ずしも一致していなかった。これは、職員が考える対人能力は“正直である”“素直である”などの側面を含むため、純粋に技能を測定した測定結果とはずれる結果となったと考えられる。

職員のなかからは、評価結果を聞いて、“わざとではない”のだと分かり、子どもの見方が変わったとの意見もあったが、このような評価結果を児童自立支援施設での日々の指導に生かしていくとするならば、これらの認識の差を縮める何らかの工夫が必要だと考えられる。

(2)児童本人の問題認識について

児童とともに、作業上の問題を本人の視点から整理して優先順位をつけた結果、本人たちも対人技能の問題が含まれていることが過半数であった。多くの子どもが、自覚的にも対人関係の問題についてなんらかの悩みを抱えていることがあきらかとなった。対人関係の相手としては、家族や友人、現在暮らす寮の仲間や先生などが上げられていた。しかし本人達との対話の中では具体的方策を発見できていない児が多く、解決の為の具体的介入が必要であることが示唆された。

(3) 児童自立支援施設での遂行の改善について

協力の得られた１つの施設の１つの寮においては、約 3 ヶ月後に再び訪問し、ESI と COPM を実施した。特に COPM においては、2/3 の生徒で３ヶ月前に上げた問題に関して遂行度と満足度の向上を報告した。このことから、児童自立支援施設で日々の生活をおくるなかで、自然と問題解決を行えていることが示唆されていた。研究者の観察によると、この寮では児童に対する職員の評価やかかわりが全般的に肯定的支持的であり、そのような環境で安全に生活することにより、遂行技能を身につけ、作業の問題を解決していく経験を積むことが出来る可能性が考えられた。

(4) 介入と効果について

協力の得られた数人に対し、対人交流を含む問題に関して本人と解決方法を話し合い、目標を決めて日々自己チェックし、一ヶ月後に再訪問して振り返りや調整を行う介入を実施した。この介入に関しては、対人交流技能のスコア、課題についての自己報告の遂行

度、満足度にも改善が見られた。
本人と共働して取り組みを決めたこと、寮の職員の方々が自己チェックに協力してくださったことが奏功したとも考えられるが、児童の様子の観察からは、日々の施設内での経験と学びによって自信を高めていたところに、「こんなにできるようになった」と報告できる相手が定期的に来ることも、大きな要因だと感じられた。
児童自立支援施設での日々の生活、職員との関わりの影響の大きさを改めて感じるとともに、作業に焦点を当てた介入が相乗効果を上げる可能性を感じた。

(5) その他
施設を卒業する直前にこの研究での評価を受け、これからの生活について具体的な話をできた児もいた。この児は評価結果により自信を得た様子であった。このように、入所時と退所時で技能を測定してゆけば、児童自立支援施設での生活の成果を示すことも出来るのではないかと考えた。各施設で、毎日取り組んでいる内容は異なっており、施設の取り組みによる成果の差も検証できるのではないかと考える。
また、施設内で処遇に困っていた児について、評価し、今後の介入へのアドバイスも含めて結果を職員に伝達したところ、新しい視点を得たことでポジディブに児に関わっていけそうだというフィードバックを得たケースもあった。生活も共にした施設内での教育指導は家庭での親子関係と同様新たな視点を入れにくく、感情論になりやすい。行き詰まった際に、作業遂行に関して評価することによって職員、児童双方にとっての突破口になる可能性も感じた。

（6）まとめ
児童自立支援施設に在籍している児童には、特に対人関係の遂行において何らかの苦手を感じている児が多く存在しており、ほとんどの場合において実際に該当年齢の子ども達より対人関係遂行の質が低いことことがあきらかになった。
このことは、児童が社会の中で自分の居場所を獲得することを妨げ、問題行動につながりやすくなる。
児童の対人交流遂行技能が低くなる背景としては、何らかの発達の偏りを適切に理解、フォローさせてきておらず、自己肯定感をさげている場合や、家庭状況により適切な社会経験が限られており未学習である場合などが想定される。
社会の中でなんらかの難しさを感じている児をより早い時期から共感的に理解し、「できるように」サポートを適切に提供していく体制作りが非常に重要になると思われる。このためには周産期からの公衆衛生や幼児期から義務教育にかけての教育の中に発達支援の視点を浸透させていく啓発が必要であると考えられる。
また同時並行的に、社会交流経験の格差を無くすための社会資源の整備開発も重要である。この視点からは、単なる資金援助や場の提供を超え、すべての子どもが、自己の能力を最大限に発達させるには、という視点から、地域社会のなかでの「できた」経験を豊かにするためのシステム作りを必要とする。
日本において、非行等の問題行動に対する取り組みとしては、保護の視点と矯正指導の視点が主流であるが、近年は子どもの貧困や虐待等の脆弱な基盤のもとに暮らす子ども達の生活支援の中に、非行予防等も織り込まれるようになってきている。
今後は、この新たな支援の流れの中に、自分の能力をよりよく発達させるという視点を加えていくことが、問題行動の予防施策として重要であると考える。

本研究は進行が遅れたため、論文投稿や報告会等が期限内に実施できなかった。今後、遂行プロフィールについての論文投稿や報告会実施を施行するとともに、さらに実際的な介入についての研究を進めていく予定である。

## ５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
<u>Mika Nagayoshi,</u> Evaluation of social interaction skills for adolescents with problem behavior living in forester home., 6th Asia Pacific Occupational Therapy Congress, 2015

## ６．研究組織
(1)研究代表者
永吉　美香（NAGAYOSHI, Mika）
県立広島大学・保健福祉学部・助教
研究者番号：30582374

(2)研究分担者
吉川　ひろみ（YOSHIKAWA, Hiromi）
県立広島大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：00191560

高木　雅之（TAKAGI, Masayuki）
県立広島大学・保健福祉学部・講師
研究者番号：90468299

古山　千佳子（KOYAMA, Chikako）
県立広島大学・保健福祉学部・准教授
研究者番号：90280205

山西　葉子（YAMANISHI, Yoko）
県立広島大学・保健福祉学部・助教

研究者番号：30423627

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者
西村　玲子（NISHIMURA, Reiko）